

2023 年度第 1 回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は 2 ページから 8 ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書で、一点一画でいねいに書きなさい。
かいしょ
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 次の文章A・Bを読んで、後の問に答えなさい。

文章A

僕の家族

六年二組 松本憲弘

僕の家には、お父さんが二人いる。お父さんとタケパバだ。

お父さんが二人いるので、お母さんはいない。だから僕の家は三人家族だ。

二人のお父さんのうち、一人は僕の本当のお父さんだが、もう一人は本当のお父さんではない。本当のお父さんのほうは、僕が生まれたときから一緒に住んでいた。そこに新しいお父さんがやって来たのだ。でも、いつやって来たのかは、はっきりとは覚えていない。僕が小さかったからだ。

お父さんは新しいほうのお父さんのことを「タケシ」と呼ぶので、昔、僕もそう呼んだことがある。そしたら、新しいほうのお父さんはとても怒った。それで「タケパバ」と呼ぶことにした。

お父さんはサラリーマンだが、タケパバは家にいて、ご飯を作ったり掃除をしたり洗濯をしたりしている。タケパバの作るご飯はとてもおいしい。タケパバは料理のプロだ。

お母さんは僕が小さかったころに死んでしまった。僕は残念だが、よく覚えていない。だけど、お母さんがどういう感じの人なのかは、なんとなく分かる。タケパバには斉藤さんという女の友達がいて、斉藤さんが家に遊びに来るとき、僕はときどき「お母さんってこういう感じなのかなあ」と思う。

斉藤さんはとてもいい人で、僕の宿題を見てくれたりする。今日は斉藤さんと一緒にハンバーグを作った。とても楽しかった。

僕は一人つ子なので兄弟がない。お父さんも一人つ子なので、僕には従兄弟もいない。時々、弟か妹がほしいな、と思うことがある。でもそれをお父さんに話したことはない。

だけど、僕にもいつか弟か妹ができるのではないかと僕は想像している。タケパバも僕のお父さんだから、タケパバの子供は、僕の兄弟になるからだ。

弟や妹ができたときには、きっと一緒に住めないと思う。でも、一緒に住んでいなくても家族だと僕は思う。

できたのは、憲弘のおかげだった。憲弘は物凄い目つきで父親を睨みつけていたのである。

美佳子がふたたび泣き出しそうな顔になったのを見て、毅は英弘に向かって言った。

「おまえは黙って席につけ」

英弘もやつとのこととで、なんとなく何が起きたのかを察知しはじめたらしく、言われたとおり黙って食卓の席についた。

毅は台所に入り、レンジの上に他にも鍋がふたつ載っているのを発見した。予想どおりと言うべきか、鍋の中身はハンバーグにはつきものの粉ふき芋、それからインゲンとニンジンのソテーだった。粉ふき芋のほうはこのままですぐにか行けそうだ。

——そうそう、これって小学校の家庭科で習うんだよね……。

などということを考えながら、毅は言う。

「美佳子ー、芋はちゃんとできてるじゃん」

ニンジンと面取りをしていないために煮崩れてしまっており、インゲンとニンジンのソテーであるべきものは「オレンジ色にまみれたインゲンのソテー」になっていたが、とにかくこれにしても、食えないわけではない。

「おいノリ、メシついであれ」

習慣になった台詞を台所から言うと、慌てたように美佳子が答えた。

「あ！ あたしがやるから！ せめてそれくらいは」

「うん。じゃ頼むよ」

それでも憲弘は台所に入ってきて、美佳子に向かって言った。

「サイトウさん、僕も手伝うよ」

どの茶碗が誰の茶碗なのか判らないであろう——最悪の想像をすれば味噌汁の椀に米飯をよそってしまいう可能性すらある——美佳子を気遣ったの行動であることが、毅には判った。

「ありがと……」

美佳子は悄然として答え、憲弘は手早く三つの茶碗を食器棚から取り出しながら言った。

「サイトウさんのはお客さま用のにするね！」

文章B

美佳子は悄然としながら、かつてはハンバーグであつたのであろうただの「挽き肉炒め」を食卓の上の皿に移しているところだった。

憲弘がやって来て、その「挽き肉炒め」を呆然とした表情で見つめた。そんな憲弘に向かって、美佳子が泣きそうな声で言う。

「ノリくん！ これ、ちゃんとハートの形してたんだよね！」

「う、うん……」

「証明してくれるよね!? ハート形してた、って」

実際に泣き出さんばかりの声で美佳子がそう言い、憲弘は自分の役割を把握したらしい、毅に向かって美佳子をかばう口調になって言った。

「ホントにハート形してたんだよ、タケッパー！一緒に作ったんだもん！」

挽き肉の成形を、ふたりでやったのだろう。美佳子がどういう訳でいきなり「ハンバーグをハート形に成形する」などという難しいことにチャレンジしようとしたのかは判らないが、成形後の挽き肉を焼いたときに何らかの失敗があつたのか、あるいは成形そのものの時点で失敗があつたのだろう。

まあとにかく、ハンバーグの形はしていないが、炒めた挽き肉である。少なくとも、食べられないものではない。だから毅は言った。

「大丈夫だよ、食べるよ、充分」

そう言う毅のすぐ隣りで、憲弘が物凄い勢いで首肯している。

——親が言うのもなんだけど、ノリってすげえいい子に育ってるじゃん……。

きのう聞いた英弘の呟きが耳の奥で甦る。思いやりのある子だ。空気を読める子でもある。

しかし思いやりがあつて空気を読める子の父親は、思いやりはともかくとして空気を読める男ではなかった。別のポロシャツに着替えて二階から降りてきた英弘は、「挽き肉炒め」の載った皿を見て、開口一番で明るく言い放つたのだった。

「あれ？ ハンバーグじゃなかったんですか？ 予定変更？ これは何ていう料理なんです？」

1 その場で英弘の首を絞めあげたい、という突発的な欲望を止めることが

誰かの結婚式の引き出物で英弘がもらってきた、上等の京焼き茶碗セットがあり、それを憲弘は「お客さま用」と呼んでいた。憲弘は「お客さま用」を含めて四つの茶碗を炊飯ジャーの前にいる美佳子に渡す。美佳子は肩を落としてジャーから米飯をよそった。

「オレンジ色にまみれたインゲンのソテー」を大皿に移しながら片目でジャーの中を盗むように見てみたが、飯はふつうに炊けているようだった。それだけでも奇跡としよう、と毅は思う。

食卓に「挽き肉炒め」と「オレンジ色にまみれたインゲンのソテー」と粉ふき芋と米飯が揃い、四人は席についた。

「じゃ……」

英弘が言い、それが合図だったかのように四人で「いただきます」を唱えた。

悪い予感ほどの中ずることになっている。「挽き肉炒め」には味がなかった。それでも英弘と憲弘は黙々と味のしない「挽き肉炒め」を口に運んでいるが、毅は黙っていればいるほど他でもなく美佳子本人の気持ちが傷つくのではないかと、と思い、笑ってしまうことにした。

「美佳子さあん！」

笑いながらそう言った。わざと「さん」を付けた。美佳子が観念したような顔になる。

「はい……」

「美佳子さん、下味に何を使いました？」

美佳子は今度はぎよつ、とした顔になり、果たして言った。

「したあじ……、って何……？」

そのことばを聞いて、毅はもう純粋に笑った。つられたように美佳子が情けない感じで笑い出し、そのことによって英弘と憲弘もようやく笑顔を見せた。毅は言う。

「醤油かけよう、醤油。な？」

「と、提案しようとしたしも思っていました」

美佳子がそう告白し、憲弘がそれでもどこか取りなしているように言う。

「醤油って便利だね、こういうとき」

憲弘のその台詞で、全員が盛大に笑った。食卓を包む笑い声の中で、毅は静かに決心した。将来もし美佳子と一緒に住むようなことになったとしても、料理だけは俺が担当しよう、と。

醤油味になった「挽き肉炒め」を食べながら、美佳子はどこか諦念の漂う呟きを洩らした。

「あたしって、つくづく料理にムイてないんだわ……」

「誰にだって向き不向きはありますよ。俺だって家事能力ゼロだし。コイツに捨てられたら、明日着る服だってないんすから」

英弘が毅のほうを顎で指すようにしながら言った。捨てられる、などという言い方が可笑しくて毅は腹の中で笑ったが、美佳子は納得できないように言い返した。

「2でも、ヒロさんは男のヒトだもの……」

美佳子のそのことばに対しては、英弘はあつさり、とても軽快に言った。

「カンケイないんじゃないっすか」

「え……？」

「男とか女とか、そういうことカンケイない時代だと思いますよ、俺」

「カンケイない……？」

「ええ。自分が向いてない分野のことは、向いてるヒトに任せる。その代わり、自分は自分が向いてる分野で役に立つ。それでいいんじゃないっすかね」メシをかつこみながら英弘はそう言い、美佳子はしばらくのあいだ箸を動かす手を休めた。

「それって……」

「どことなくぼんやりとして美佳子が言ったので、英弘は視線をあげた。

「それって……、あたしが前から考えてたこととすごくよく似てます……」

男とか女とかそういうことに関係なく、「外で働いて稼いでくれる人」と「家の中の仕事を担当する人」が一緒に住んでいるのは羨ましい、とかつて美佳子が言っていたのを毅は思い出す。

「でも、そういうコト口に出して言うと、それは『フツーじゃない』みたいなこと言われちゃうんですよね……」

一瞬、食卓に静寂が流れた。

小学校六年生の真剣なその呟きを聞いて、4大人三人は涙が出るほど笑った。

(鷺沢萌「渡辺毅のウェルカム・ホーム」

『ウェルカム・ホーム!』[新潮社]より)

問1 傍線部1「その場で英弘の首を絞めあげたい、という突発的な欲望を止めることができた」とありますが、次の文はこの時の毅の心情について説明したものです。文中の*i*に入ることを文章Bから十字以上十五字以内で書き抜き、*ii*・*iii*に入ることをばの組み合わせとして最もふさわしいものを後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

i に育った憲弘が懸命に美佳子をかばおうとしていたにもかかわらず、英弘が無神経なことばを発したことは頭にきたものの、憲弘が英弘に*ii* のこともった眼差しを向けているさまを見て、*iii* ことができた。

- ア ii あわれみ iii 頭を冷やす
イ ii 不満 iii 意気投合する
ウ ii 憎悪 iii うつぶんを晴らす
エ ii あきらめ iii 心をなごます
オ ii 非難 iii 怒りを抑える

問2 傍線部2「でも、ヒロさんは男のヒトだもの……」とありますが、この時の美佳子の心情はどのようなものですか。文章Bの中のことばを用いて、解答欄に合うように、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

男の英弘はたとえ家事能力がなくてもおかしくはないが、**「四十字以上五十字以内」**と感じている。

問3 **X** に入ることばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

いみじくも毅は、憲弘の作文を読んできたあとき、英弘に向かって言ったものだ。

「だってこれ、フツのヒトが読んだら……!」

そうしていみじくも英弘はそのあとに言ったものだ。

別に「いちおう父子家庭」じゃねえよ。「ちゃんとした父子家庭」だよ。

毅の口が自然に動いた。

「フツ、とかさ。ちゃんとしてる、とかさ……」

三人の目が自分のほうを向いたのを感じる。

「そういうの、もういいじゃん。」

「え？」

美佳子が物問いたげな視線を寄越しながら言う。

「たとえば女なのにハンバーグひとつ満足に作れない美佳子はフツか？」

「フツじゃない、と自分では思う」

「俺は全然フツのこととして受け容れられるぞ」

「ホントに？」

「ホントに」

美佳子が泣き笑いみたいな顔になって頷き、毅は続ける。

「男なのにシユフやつてる俺はフツか？」

「……」

「自分ではフツじゃないって思ってるけど、美佳子はフツに受けとめてくれるだろ？」

「うん……」

「七年も前に妻に先立たれてるのに、再婚しようとしてもしないでオトコに家事と育児任せてるヒロはフツか？」

それには英弘が即座に明るく答えた。

「フツじゃありません！」

そうして父親のことばを聞いた憲弘は、かなり真面目な口調で、それからなぜか少し残念そうに言った。

「3なんだ……、フツの僕だけなんだ……」

ア 誰もフツじゃないし、誰もフツじゃないんだから、逆にみんながフツなんだよ

イ みんなフツじゃないし、みんなフツじゃないんだから、結局俺だけはフツなんだよ

ウ 俺たちはフツだし、俺たちがフツなんだったら、逆にみんながフツじゃないんだよ

エ 俺もフツじゃないし、美佳子もフツじゃないんだから、結局俺たちはフツじゃないんだよ

オ みんなフツだし、誰もがフツなんだったら、逆に俺だけはフツじゃないんだよ

問4 文章Bからわかる英弘の人物像についての説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人からは不躰だと思われることもあるが、偏見に惑わされず知的に物事の本質を見据えている。

イ 無邪気で飾り気がなく人当たりもやわらかいが、正義感が強く心の中には譲れない信念を持っている。

ウ 気分によっては相手に配慮することもあるが、基本は人に対する関心が薄く自由気ままに生きている。

エ 細やかな気づかいが得意ではないが、自分や相手のありのままを受け入れることができています。

オ 自らの至らない部分への自覚はあるが、それを変えることができず現状に対して開き直っている。

問5 文章Aからわかる憲弘の家族に対する思いや考えとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 実の父母とその子どもが暮らす家族の形にそこがれを感じている。
イ 自分の家族は他の平凡な家族よりもおもしろいと自慢に思っている。

ウ 父親が二人いることに違和感を覚えているものの二人を好いている。
エ 家族構成や血のつながりにとられず家族に愛着をもっている。
オ 母親が死んでしまった寂しさをいまだに埋めきれないでいる。

問6 傍線部3「なんだ……、フツーなの僕だけなんだ……」とありますが、文章Aもふまえ、この時の憲弘の心情について説明した選択肢として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の家族は「フツーじゃない」と感じていたが、周りの大人たちも皆彼ら自身を「フツーじゃない」と考えていたことを知り、うすうす感じていた事実を突きつけられることとなり、うろたえている。
イ 母親が亡くなって以来、家の中の環境が変わっていくことを受け入れつつも「フツー」の家族になれるよう願っていたのに、自分たちは「フツーじゃない」と開き直る大人たちの様子を見て、失望している。
ウ 自分たちのことを「フツー」の家族だと考えていたのに、自分以外の大人たちは皆彼ら自身のことを「フツーじゃない」というので、自身のことを「フツー」だと思っていたのは自分だけだと知り、とまどっている。
エ 「フツー」の小学生として、家族のために気をつかうのは「フツー」のことだと思い自分なりに頑張ってきたが、そんな自分を尻目に大人たちが好き勝手なことを言い出すのを目の当たりにし、呆然としている。
オ せめて実の父親には「フツー」であって欲しいと願っていたにもかかわらず、英弘は自身を「フツーじゃない」とあつさり認めてしまったので、父親への思いが裏切られたように感じられ、悲しんでいる。

問7 傍線部4「大人三人は涙が出るほど笑った」とありますが、この時の「大人三人」に共通する心情を示したことばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 優越感とさげすみ イ 感嘆と愉快
エ 信頼と歓喜 オ 愛情とおかしみ ウ 後悔とむなしさ

もとづいて押し戻してくる。この押し合いが続く間は、エコトーンとしての人里は維持される。

人里は心なごむ自然であり、人はそこに自然を見、そこから自然の論理を学ぶことができる。自然の論理を知ること——それは今日の人間にとってきわめて大切な意味をもっている。ぼくが「人里をつくろう」と訴えているのもそのためである。

では、人里をつくるにはどうしたらよいのか。それは人間の論理の無理押しをしないことである。自然が自然の論理で押し返してくるのを許すことである。

人間はしばしば自然の巻き返しを嫌い、自然の論理を徹底的につぶしてしまおうとする。道は完璧に舗装し、側溝は水を流す目的だけのためにコンクリートで固める。林の木の侵入を食い止めるため芝生にして、それを維持する。そしていかにも自然らしく見えるように植木を植え、その植木はこざいに剪定する。

このようにして生じるものは2人里ではなく、たんに擬似人里、人里もどきにすぎない。人里もどきには自然の論理ははたらいっていない。わずかながらはたらくとしても、人間は人間の論理にしたがって、自然が生やした草を刈り、虫を退治する。一見、自然のように見えても、そこに自然はない。徹底的に人間の論理で貫かれていくからである。今、あちこちでつくられている「自然の森」や「水と緑の公園」は、そのほとんどすべてがこのような人里もどきであると言つてよい。

なぜそれがいけないのか？ それは人間が「自然界のバランス」を崩しているからだ、と考える人がある。残念ながらそうではない。人間が「自然と共生する」姿勢を忘れていくからだと言ふ人もある。これも残念ながらあつていない。

「自然界のバランス」「自然と人間の共生」というようなことはよく言われる。いかにも人を納得させるひびきをもったことばである。けれど、近年の動物行動学あるいは行動生態学の研究を見ると、どうもそのようなものはわれわれの幻想にすぎなかったのではないかという気がしてくる。

3 昔の生態学は、自然界のバランス、生態系（エコシステム）の調和、と

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

1 エコトーンは、環境の状態が移行する場所である。それはしたがって、けつして広大な面積にわたることはない。エコトーンが幅何百キロにわたって広がるということはあり得ないのである。

人里はまさにこのようなエコトーンなのだ。人里の特徴、そして人里のもつ心なごむ景観は、人里がエコトーンであるがゆえに生まれるのである。

人が手を加えない自然の中で、エコトーンはつねにそれまでそこにあつた姿の自然の再生、更新の場として存在している。いろいろな理由から深い針葉樹林であつた場所に生じたエコトーンは、ほうっておかれればしだいにその姿を変えていって、いずれは深い針葉樹林を再生するだろう。老木は枯れて倒れるであろうが、いずれはあとから育ってきた木によつて更新されるだろう。そして、そのエコトーンに生きていた植物や動物は、また別の場所に生じた新しいエコトーンへと移り住んでいくことであろう。自然ではいつもこのようなことが起こっている。

重要なのは、そこで起こっていることはすべて自然の「論理」にしたがつたものだということである。

老木が倒れたり、雷で山火事が生じたりするかわりに、人間が住みついて林を切り開いても、同じような事態が生じる。そこには新しいエコトーンが生まれ、それまでの自然の再生のプロセスが始まる。

純自然の場合と異なるのは、人間がこの自然の再生を嫌い、つねにそれと闘つてきたことである。その結果、自然の再生は完成することなく続けられる。そして、人間のそれに対する闘いも続けられてきた。

この闘いが続いている間、エコトーンはもとの自然の再生による最終的な消滅に至ることなく維持される。この状態が人里なのである。人間はもとの形での自然は破壊したかもしれないが、新しいaヨウソウの自然を生じさせ、しかもそれをほぼそのままに維持するというはたらきをすることになった。人里はこのようにbトクイな自然なのである。

人里においては、人間が人間の意図にもとづいて、そして人間の論理にしたがつて、自然に変化を加える。しかし、自然は自然なりに、自然の論理に

いうことを強調した。そして、人間がこのバランスを崩さないようにすれば、自然と共生していけると考えた。しかしこの一〇年、二〇年ほどの間に明らかになってきたとおり、自然界の中では、動物も植物もそれぞれの個体がそれぞれ自分自身の子孫をできるだけたくさん後代に残そうとして、4きわめて利己的にふるまっているように見える。かつて信じられていた「種族保存のためのシステム」というものもなく、個体がそれぞれ他人を蹴落としてもいいから自分だけは子孫を残そうと、きわめて利己的にふるまっている結果として、種族が維持され、進化も起こるのである。「自然界のバランス」なるものも、そこになにか予定調和的なバランスがあつて、自然はそれを目指して動いている、というようなものではけつしてない。ある個体が自分の利己を追求しすぎると、そのしつぺ返しを受けて引き下がらざるを得ない。こういう形で結果的にバランスが保たれているにすぎないのだ。

自然界に見られる「共生」についても同じような見方ができる。花と昆虫のみごとな共生に、われわれは心を打たれる。けれどこれも、花と昆虫が「お互いうまく生きていきましよう」と言つてやっていることではないらしい。花は昆虫に花粉を運んでもらえばよいのであつて、つくるのにコストのかかる蜜など提供したくはない。昆虫は昆虫で、自分たちの食物である蜜を花からできるだけたくさんcウバえばいいのであつて、花粉など運んでやるつもりは毛頭ない。

この両者の「利己」がぶつかりあつたとき、花はますます精巧な構造を発達させることになった。できるだけ少ない蜜を提供しつづ、なんとしても昆虫の体に花粉がついて、昆虫がいやでも花粉を運んでしまうような花の構造ができあがつていったのである。

人間も動物であるから、利己的にふるまうのは当然である。しかし、動物たちは利己的であるがゆえに、損することを経端に嫌う。浅はかに利己的にふるまいすぎてしつぺ返しを食つたときに、やっとそれをやめるのではなく、もつと「先」を読んでいくらしい。どのようにしてそれを予知するのかわからないが、これはどうも損になりそうだと思つたら、もうそれ以上進まないのである。その点では、動物たちのほうが徹底して利己的である。きわめて賢く利己的だと言つてもよからう。

5 人間はじつに浅はかに利己的であった。しかしこれからは自然が自然の論理でふるまうのを許せるぐらいに「賢く利己的に」ふるまうべきではなからうか？

(日高敏隆『日高敏隆選集Ⅷ 人間とはどういう動物か』

「ランダムハウス講談社」より)

問 1 傍線部 a～c のカタカナを漢字に直しなさい。

問 2 傍線部 1「エコトーン」とありますが、これはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な環境が思わぬ外圧によって変化し、移り変わっていく場のことであり、時折自然の論理がはたらいっている場である。

イ 人間が自然を開発した状態を言い、自然が人間の力を押し戻し、再生しようとして結果的に魅力的な外観を呈する場である。

ウ 新たな環境に移り変わる場であり、自然の状況でも人工的にも生じ得る、自然の再生と更新の場である。

エ 環境の移行と変化の場のことであり、かつては自然界の大部分を占めていたが、現在は著しく減少してきている。

問 3 傍線部 2「人里ではなく、たんに擬似人里、人里もどきにすぎない」とありますが、「人里」や「人里もどき」について説明した選択肢として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いずれも自然の環境に人の手が入ったものだが、人里もどきでは自然の論理が破壊され、人工的で見せかけの自然のみが存在することになる。

イ 人里とは人間が自身のために作り上げた安らぎの場のことだが、いずれはエコトーンとなり純粋な自然に戻ってしまう。

ウ 人里もどきは、人間の都合のみで自然環境を破壊した結果生じた人工的なものだが、皮肉にも人間にとって懐かしさを覚える環境となる。

エ 人里は人間の自分勝手な行動を出来るだけ排除し、自然との共存共栄を目指すものであり、日本人は古来徹底してこの考え方を実践してきた。

オ 人里はエコトーンとして人間に悲壮な感情を抱かせるが、人里もどきはエコトーンではあり得ず、幻想としての環境が現出されることとなる。

問 4 傍線部 3「昔の生態学」では、自然界をどのように捉えていましたか。本文中から三十字で探し、最初の二字を書き抜きなさい。

問 5 傍線部 4「きわめて利己的にふるまっている」とありますが、ここでいう「利己的」とはどういう意味ですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちの種族を保存するために、他の個体を蹴落とそうとすること。

イ 共生状態を維持するよりも、自分の快楽を優先しようとすること。

ウ 他者との共生をはかる一方で、自身の利益にならないことは決してしないこと。

エ 自然環境に配慮しないで、自身の幸福を最優先すること。

オ 他者の存在を顧みずに、個体それぞれが自身の子孫を残そうとすること。

問 6 傍線部 5「人間はじつに浅はかに利己的であった」とありますが、なぜそのようにいえるのですか。解答欄に合うように、二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

動物たちとは異なり、人間は「二十五字以上三十五字以内」

2023年度 第1回	国語	受験番号				氏名	
---------------	----	------	--	--	--	----	--

問6
動物たちとは異なり、人間は

25

35

問2

問3

問4

問5

問1
a
b
c
えば

二

問3

問4

問5

問6

問7

50

40

と感じている。

問2
男の英弘はたとえ家事能力がなくてもおかしくはないが、

ii・iii

問1
i

10

15

合計